

第三章 文法體系の基礎理論

一

文法學は、雜多な文法の原本事實を脈絡統一ある文法體系として認識する科學的勞作である。文法事實の體系化を企圖するものである。文法體系の學である。文法體系とは如何なることを言ふのであるか。文法事實の近寄せは文法學の對象論であり、純粹言語學としての文法學への自覺は文法學の方法論であるとすれば、文法體系の確認は文法學の目的論であると言ふことが出来る。かゝる文法學的勞作の目的である文法體系の眞の姿は如何あるべきものであるか。私はこの一文に於て、かやうな文法學の究極的到達點とも言ふべき事柄に就いて論じてみたいと思ふ。

體系とは如何なるものであるか。體系は外面的に構成したものであつてはならぬ。論理的公式や實用的便宜や主觀的好みを以て、事實性を外から區劃する底のものではない。併し、勿論原本事實そのまゝの姿を體系と言ふことが出来ない。原本事實の中には體系性を可能態として含んでゐると言ふことが出来るが、原本事實は原本事實である。原本事實の單なる記述展開が體系ではない。體

系には方法が先行しなければならない。方法論的媒介によつて原本事實が理論體系にまで發展するのである。故に體系は、原本事實が方法論的道程を経て成立更生して行く科學的事實であると言ふことが出来る。原本事實が方法を媒介作用として死して生れ行く事實性が體系の姿である。方法とは如何なるものを言ふのであるか。方法は勿論單なる主觀作用ではない。主觀的方法是眞の體系を成立せしめることが出来ない。方法はどこまでも客觀的でなければならぬ。客觀的方法とは如何なるものであるか。併し、客觀的方法と言つても客觀的事實そのものの中に何等方法といふ如きものが含まれてゐる譯ではない。方法性は事實性に對立するものでなければならぬ。併し單に事實に對立してゐる方法は主觀的方法たるの外はない。故に方法性は事實性に即するものでなければならぬ。即するといふことは兩者が對立的であつて、同時に又合一的であるといふ物の眞の具體的存在態である。然もその對立は徹底的に對立的であり、合一も亦徹底的に合一的であればある程、眞に即するといふことが出来る。所謂矛盾的自己同一でなければならぬ。事實も方法も、雙方から歩寄り妥協するといふやうなものではなく、一面に於て兩者は何處までも相譲ることのない絶對的矛盾物でなければならぬ。眞に物と心とでなければならぬ。事實性が方法の犠牲に供せられるやうなことがあつてはならず、又事實の故に方法性を萎縮せしめる如きことがあつてはならぬ。兩者がそれ自身として潑刺と生きてゐなければならぬ。而して、又他面この兩者が何處までも孤存を固執し乖離

してゐるのではなく、相補的に一となるといふ關係のもでなければならぬ。物心一如態でなければならぬ。事實が方法に照破せられ、方法が事實によつて充たされるといふ同一的兩面といった關係がなければならぬ。そこに眞の意味の方法論的根據があり、客觀的方法といふものはかやうな立場に於て成立するのである。故に客觀的方法是內在的方法である。事實を眞に内から見る方法である。事實を事實の中から照破する方法である。而して方法が事實に内在し眞に内から見るといふこと、事實を照破するといふことは事實を作ることである。受容的側面から言へば見ることであるが遂行的側面から言へば作ることである。事實を更生せしめること、原本事實を否定し體系事實を創造することである。物を作るといふことは如何なることであるか。作るとは物の要素の結合關係を變更することである。然もそれにはどこまでも物の性に従ふといふことがなければならぬ。科學的勞作は特にかやうな側面に成立するのである。作ることの即物面へ極限的に進んだところに科學の合理性といふものがあるのである。故に見るといふのである。理論體系とか合理體系とかといふものの成立するといふことは、かゝる立場に新しい事實機構が作られることである。原本事實の要素を照破し分析することによつて、其の原本事實の眞實性を失ふことなく之が組織換へを爲し、より本質的な事實機構として造り上げたものが體系である。原本事實は原本事實であるだけに、種々の挾雜物があり纏があり、謂はゞ混濁物であるが、體系はかゝる混濁を克服することによつて成

立した事實性の姿である。其處に主觀に墮するやうなことのない、強靱にして謙虛な客觀的方法或は内在的方法といふものの支柱媒介がなければならぬ。

故に體系は常に發展するものでなければならぬ。動くものでなければならぬ。體系には歴史がなければならぬ。體系は社會的でなければならぬ。動かざる體系は枯死したる體系である。對話性のない體系はこの世界から顛落したる體系である。落伍者である。それは言ふまでもなく、主觀的方法に媒介されたものに外ならぬ。既成の論理的範疇とか他の科學方法とか主觀的趣向とか實用的便宜とか、さやうなものに媒介されたるものはそのまゝ一度切りのもので、歴史などといふことはあり得ない。孤立體系である。社會的に問題とされぬ體系である。眞の客觀的方法内在的方法によつて媒介せられる體系は動的でなければならぬ。故に良心的な學者は絶えず自家の體系を圓心的に發展せしめて行く。學界といふものにもかやうな動きがなければならぬ。眞の意味の繼承といふことと爭鬭とがなければならぬ。それは科學性そのものが歴史的社會的なものであるからである。或一個人のものでなく公のものであるからである。億兆がばら／＼なものでなくて一心的なものであるからである。かやうに體系といふものは動いて行くものであるが、それは如何なることであるか。客觀的方法内在的方法によつて媒介せられる體系が動的であるといふのは如何なることであるか。眞に客觀的内在的方法は事實と辯證法的關係にあるものでなければならぬ。事實性と方法性

とは常に辯證法的關係に立つものでなければならぬ。體系はかゝる事實性と方法性との辯證法によつて成立して行く、體系無限の一々でなければならぬ。故に嚴密な意味に於て原本事實などといふものはないのである。最終的な理想體系がないと同様に單に所與的な原本事實もないのである。原本事實とせられるもの、それ自身から已に未顯的體系である。意に滿たざる、やがて作らるべき體系である。然も體系と然稱するものも眞に完成せられたものではない。常に未顯の顯に過ぎない。此の世界が歴史的社會的である限り、そこに成立する科學體系の如きも永劫に然あるものでなければならぬ。そこに科學の天壤無窮性があるのである。

我々は常に強靱にして然も謙虛な方法論を持して、雜多に開けて來る文法事實を入念に體系づけて行かなければならぬ。それは事實を極微の末々に至るまで要素的に照破し盡し、かくてその混沌性を加除訂正し組織整序して、より眞實なる文法事實として作り行くことである。故に文法體系は、勿論單なる文法事實の羅列であつてはならぬ。羅列も一種の體系かも知れないが、それは方法なき體系に過ぎない。ともするとかゝる事實の羅列的記載を以て、客觀的であるとか事實に忠實であるとか言ふのであるが、それは學問から逃避する方向である。勿論事實の蒐集といふことは重要な學理的勞作の一部であるが、それはどこまでも準備作業的意味のものに過ぎない。否、かゝる準備作業をする人々も科學的體制の全面から考へて大いに必要であるには相違ないが、只かゝる事例の蒐集

羅列を事とすることを以て科學的なりと主張してはならないのである。併し之と又反對に眞に事實性を見ないで、事實に即一しない方法論的根據を以て、例へば形式論理とか或種の心理學とか、社會學更に生理學物理學等の方法を多少之に近附け、それを何よりの方法的武器として文法體系を建設しようと試みる人々もある。私はかやうな人々のその勇敢さに敬服するが、惜むらくは文法學そのものにとつて何等實益なきものである。それよりも尙笑止なるは、自己流の詭辯想像或は狹隘なる信念的なものを以て、直押しに體系をでつち舉げようと企てる人々である。かやうな人々の爲に世界の科學的競争場裡に直面するこの日本科學が可成無駄をするのではないかと思ふ。併しこの固陋者と全く正反對なところにインターナショナルリズムの一群が位するのである。之等の人々は學界でも最も有能なる人々で、よく西歐の新學說を消化し、動もすれば因循姑息に流れ易い國語學者を鞭撻して來た。併しそれは單なる紹介者であり破壊者でしかなかつた。更にベダントに過ぎなかつた。日本文法學に對し眞に熱意ある建設者と言ふことは出來ない。勿論之等の人々は學界の探偵として重寶なる人々ではあるが、それは只それだけの事であつて、ドイツとかフランスの方法體系が然々であるからと言つて、それを直ちに日本文法學に押附けんとする如き素振をしてはならない。日本文法學には日本文法學特有の方法論がなければならず、又古來脈々としてそれが流れて來てゐる。ガベレンツも言ふやうに、國語の研究は過去に於て日本學問中最も光輝ある業績を残してゐる。

のである。そこには日本學的知性の粹が集中されてゐる筈であり、今日多少下火になつてゐる嫌はあるが、我々の眞に繼承し發展させて行かなければならぬ方法論的根據はかやうなところに伏在してゐるのである。それは言ふまでもなく、眞に日本文法の事實性に即して鍊り鍛へられた方法であつた。概念的扮飾の點に於て缺くところがあつたかも知れないが、兎も角眞實なる方法論の道を辿つて來たのである。種々の外來的方法理論といふものは、かやうな正統的なものを益々顯揚する意味のものとしてそれ相應の價值を認めなければならぬが、若しそれ以外のものであつたら却つて日本文法學の行手を暗くするものと言はなければならぬ。

文法體系は方法性なき單なる文法事實の蒐集彙類の如きものでもなく、又主觀的外在的方法に媒介せられたる似而非な體系でもなく、どこまでも事實と方法との辯證法的緊張の持續に於て成立して行く生動せる體系でなければならぬ。單なる原本事實の停頓固執ではなく、事實そのものから第二事實第三事實……といふやうに生れ行く發展的體系でなければならぬ、又單なる方法論的思辨紹介に終ることなく積極的に事實そのものに潜り抜けて第一體系第二體系第三體系……といふ如く作り行く歴史的體系でなければならぬ。現今我が國語學界ではかゝる事實と方法との即一性が缺けてゐるのではなからうか。事實性を主張する人は事實のみに目を呉れ、方法性を主張する人は方法論のみに專念してゐるといふ學の乖離性がそのまゝ放任されてゐるのではなからうか。例へば文献派

とか理念派とかといふやうに只對立してゐるのではなからうか。歌學者とか國學者とかの研究は、素朴ながらも、そこに辯證法的統一があつたと思ふ。今日、日本科學に於て醫學の如きものが隆昌を極めてゐる如く、當時日本學の王座を占め學の儀範とされてゐた眞の原因はかやうなところにあつたのではなからうか。一體國學とか日本科學とかといふやうな國家的國民的科學の中軸となるものは記號學特に言語學的なものでなければならぬ。往年上田萬年博士が、國語は國民の精神的血液であると言はれた如く、日本語は日本國民の精神的物質社會的物質である。日本人の眞の結紐、心的行動の媒介物は日本語を措いては外に之と纏つたものは餘り無いのである。日本語は日本文化の髓であり日本精神活動の核實である。日本語の科學、例へば國語學とか日本言語學とか、更に突詰めて日本文法學などといふものはもつと奮發して、精神科學自然科學兩界の骨子的なものとなるといふことがなければ、日本科學といふものの眞の健全なる發展を望めないのではないかと思ふ。古代のギリシヤ學があれ程までに發展し今日尙世界文明の源流として仰がれてゐる所以のものはロゴス性にあるのである。印度文明支那文明の如きは必ずしもロゴス的といふことは出来ないが、その盛時にありてはロゴスの鍛鍊を怠らなかつた。アラビヤ文明はコランに盡きると謂はれてゐる。勿論科學的勞作はロゴスに墮してはならぬが、全科學の核實はロゴスの正しき認識にあると思ふ。かやうな譯で、日本文法學は只それ自身の自律的發展の爲ばかりではなく、日本科學の生命核とい

つた自覺に於て一層奮起する必要があるのである。文法學の奮起といふことは如何なることであるか。それは言ふまでもなく文法的事實性と方法性とは、眞に辯證法的關係に立つといふことでなければならぬ。文献派と理念派とが自家の外殻をかなぐり捨て、協和することではなければならぬ。クロチエの言種ではないが、トンネルの兩方から文獻的に實證する人と理念的に考察する人とは、雙方向側の鶴嘴の音を聞くといふ立場に立たねばならぬ。さうしてかやうな立場に於て、眞の日本文法體系を樹立しなければならぬ。それは勿論歴史的發展的體系の一つでなければならぬ。古代の點法の如きものから次第に開けて來た歌學的文法體系、それを繼承した國學的文法體系、更にその正系に立ち西歐文典に鍛へられて來た維新以來の文法體系、かやうなものを承けて後の文法學の爲に残される意味のものでなければならぬ。

二

文法體系は、文法の原本的事實が方法的媒介によつて體系的事實にまで昇華したものである。文法の原本的事實は一般に如何なる性質のものであるか。それは語彙的なものの多分に纏綿したまゝの文法事實と考へなければならぬ。謂はゞ語彙性と文法性との中間的事實である。ソッスールの共時相とか特定共時相とか、個人の腦中に在る潜在的體系などの如きは、それが比較的にな文法性の方

向に傾いたものに過ぎない。故に極めて不徹底なものと言はなければならない。辭書の内容とか種類の通時論的なものは、極度に語彙性に傾いたところに成立してゐるのである。之に反して文法體系といふものは、極度に文法性に傾いたところに成立して行くのである。故に文法體系を形成せしめるには、原本事實の語彙的纏綿を次第に排除する方向に進まなければならない。記號學は一般に、表現物的事例の重加により記號物を析出する如く、文法學もかゝる重加析出法によつて語彙的羈絆を脱し、次第に文法性といふものを顯にして行くといふ方向に進まなければならないのである。かやうにして原本的事實から語彙性を消去し、先づ見られるものは個々の文法事實、即ち言語の斷止連續の種々相である。詞の切れとつゞきのさまゞである。文成立と句結體の諸法である。こゝに於て文法學は一應之等文法事實の體系づけを行ふことが出来る。例へば文法事實の諸法を斷止法と連續法とか、文結成の法と句結體の法とかといふものに分け、前者には之々のもの後者には之々のものといふやうに細別して體系を立てることが出来る。イエスペルセンの *junction* と *hexus* の考へ方の如きはそれ自身不完全なものであるが之に類する。併し文法體系は勿論單にそれだけで止まるべきものではない。連語論とか統辭論とかといふ如きもので終るべきものではない。然も主格とか述格とか修飾格などと言つても語彙的なものに依據するところ多く、語彙的渣滓の多分に殘存せるものと言はなければならない。故に、更に高度な體系づけに進まなければならないのである。

句の姿體は二單位的累加層と見なければならぬが、その要素的なものを私は節と稱するのである。かゝる節の斷止態が切れ詞として文に結成し、連續態がつゞき詞として句に結體する。然してこの兩者に種々の格或は方式があるのである。併し節が普通に語と混同されてさへゐるやうに、未だ語彙的な色彩が濃厚であり、隨つて只單に此の節を種々に範類して體系づけて見ても、到底眞の文法體系といふものに到達することが出来ない。文法體系を得んが爲には今一段とその語彙物を撤去することがなければならぬのである。一體、節には例外なく語彙的側面とも言ふべき意義部と文法的側面とも言ふべき文法部或は形態部とがある。そこで今我々の取るべき方法は前者を捨象し後者を析出するにあるのである。かやうにして節から析出された文法部とか形態部とかを言語形態文法形態或は單に形態と稱する。形態には種々のものがある。語順の如き非實質的なものもあるし又語形變化や添着語片の如き實質的なものもある。併し形態である點に於ては何等變りのないものと言はねばならぬ。而してかゝる形態は如何なる能力を有するものであるかと言へば、言語の斷止連續なる文法機能を表示するものである。文法機能の能記的なものである。文法素であり更に文法語である。かやうな形態により多様な節が成立することが出来るのである。節成立の契機となる要素である。直接直接に成節素である。かやうな形態を組織立て、文法體系を形成することが出来る。例へば語順法とか屈折法とか膠着法とかといふものを展開せしめて行くことが出来るのである。か

やうな形態の體系づけは、多くの言語學者文法學、殊にその科學的體系を欲した人々によつて種々に企圖せられたところである。それは音韻や語彙などに對向し文法の最も記號物的に見える部分であり、一方又比較言語學とか史的言語學の如き通時論的なものにとつて恰好の材料であつたからである。併しそれだけに又形態は語彙的なものと言はなければならず、事實、形態の單なる組織づけのみにては未だ眞の文法體系に到達することが不可能なのである。我々は更にかゝる形態から語彙的殘渣を捨象する方向に進む必要がある。

形態の中でも語順の如きものは非實質的であり、殆んど語彙的殘渣を有してゐないとも考へることが出来る。純文法的であるとも考へられる。併し語順も結構言語形態に比肩し、又その代理をしたりすることもあるのである。矢張他の實質的形態と同一水準に於て考へて行かねばならぬ。屈折や膠着が語彙的で、語順だけを非語彙的とすることは出来ない。隨つて形態から語彙的殘渣を捨象すると言つても、それは語順的方向へ進む譯ではない。形態の語彙的殘渣を捨象するには形態を超えるなければならないのである。形態を超えるにはその形態を統一するものを求めなければならぬ。形態が幾つかの文法事實を指標する能記的なものとして之を統一した如く、かゝる形態を更に統一するものを求めなければならぬのである。形態を統一するものは、例へば或動詞が種々の活用形の統體であると言ふ如く、普通には語の如きものであると考へられてゐるかも知れない。併し個々の語

が形態の統一者ではない。個々の語は却つて形態に統一されてゐると見なければならぬ。例へば、「行く」とか「来る」とかといふ個々の語の語尾變化は眞の意味の形態ではない。形態の一つの表れであり、形態の一角に過ぎない。つまり語形である。又個々の語の集積でもない。終止とか連體とか已然など六種に活用する語といふものは、現在辭書に載せられてゐるものだけではなく、過去にも無數にあつたらうし未來にも無數に出て来るであらう。形態の統一者が個々の語でもなくその集積でもなければ何であらうか。勿論意義部の如きものでは尙更ない。意義部は最も語彙的な部面である。それはかゝる語彙的なものを眞に超越せるものでなければならぬ。然らば何であるか。普通にかやうなものを品詞とか語範疇などと言つてゐる。併しそれは極めて曖昧な名稱である。正しくはイェルムスレウの如く機能範疇 (Catégorie fonctionnelle) と稱すべきものであらう。兎も角それは何等の實質性も見ることの出来ないものであるが、眞に形態を所屬せしめ之を統率するものであるのみならず、かゝる形態の統一を通して、文法機能の全領域を區劃しその範疇となるものである。形態の所屬によつて構想される非實質的な文法機能の構造式である。勿論それ／＼然るべき語群に對應し之を指示する能力を有するのであるが、只語そのものでもなく語群そのものでもなく意義部の如きものとも全然異なるものであることを銘記して置かねばならない。

かゝる機能範疇は文法體系の最も本質的な部分であり、最高の概念である。執拗なる語彙的糾纏

も此處ばかりは如何ともすることが出來ず、却つて残りなく之に抱擁せられて、體系の質料面に晏如としてゐる譯である。個々の文法事實も雑多な形態も、こゝに所を得て一自律的體系を成してゐるのである。随つて文法學的勞作の究極的目標もそこになければならぬ。文法學は文法體系を組織立てんとする科學的努力であるが、その企圖の核心は實に機能範疇の設定にあるのである。古來文法學者をして最もその頭腦を悩ました問題は、一に此處に歸着する。實際之が未決のまゝでは體系の立て様がないのである。單に文法事實のエンサイクロペディアに終らなければならない。併しそれでは文法學なきに等しく、文法學已に然れば言語科學も然り、更に進めて言へば、それが科學の全面文化の全面に於ける死活の問題といふことになつて來るのである。歐米文化はギリシャ・ラテンの祖述であるときへ謂はれてゐるのであるが、翻つてその文法學に於ける機能範疇論の行き方を見るにそれが眞相であると言はざるを得ないのである。現在歐米の何處の國の通用文典にも見出される名詞、形容詞、數詞、動詞、代名詞、冠詞、副詞、前置詞、接續詞、間投詞等の範疇は、之を遠くギリシャ・ラテンの昔に溯ることが出來るのである。然もそれがアメリカの土人語やアフリカの土人語にばかりではなく、東洋語の研究にも適用せられ、更に我が國の文法學をも支配してゐるのである。然るに一方又ヴァンドリエス、メイユ、サビア、ドラクロアの如き有數の大家が自らの言語の範疇が立たなくて踴いてゐるといふ有様である。我々日本國民は此處に三思しなければな

らぬのではないかと思ふ。日本科學とか日本學とか日本文化とかと言つてゐても、そのロゴス的心髓とも言ふべき文法機能の範疇が依然としてギリシャ・ラテン系では何にもならないではないか。印度文明の盛なりし頃に述作されてあつた文典の研究によつて、サンスクリットの真相を知つた歐洲の學界は如何に顛動した事か。私は思ふ。今日諸科中最も疎かにされてゐるものは言語科學であり言語科學中又、文法學、然もその文法學の中で、機能範疇の問題は常に置き去りを喰つてゐるのである。學者、朝野の錯誤でなくて何であらう。

一體今日の人々は、事毎に精神とか魂とかいふことを叫ぶのであるが、心髓とか核心とかいふものを忘れて、只ふはくしたさう言ふ觀念や理念のみを問題にしてゐるのではなからうか。心の媒介を失つて物はなく、物の媒介を失つて心といふものもないのである。教學などと言つても、その媒物としての言語文字等の記號物を正さなくては、それが不成に終ることは火を観るよりも明かなのである。而してかやうな記號物の中言語は最も主要なものであり、言語の中文法、その文法體系を機能範疇が統率してゐるのである。故に奇癖な言を弄する様ではあるが、機能範疇といふことは教學刷新の心髓であり核心でなければならない。それは兎も角として、機能範疇は文法體系のアルファでありオメガである。文法體系を作る努力の究極目標は機能範疇であるが、又その機能範疇が定立せられてゐなければ、文法體系への出發は出来ない。而も文法體系の隅の隅まで底の底まで

かゝる機能範疇が支配してゐる。文法體系即機能範疇と言つてよい。文法學は機能範疇に出發し機能範疇を目標とし機能範疇に支配せられ、絶えず機能範疇を念として進み、かくてその究極は又機能範疇に到達すべきものである。機能範疇論は文法體系の序説であり結論であり、基礎理論でなければならぬ。

文法體系の展敘様式にはかゝる機能範疇論の置き方により大體三つの種類があるやうである。その第一は機能範疇論を體系展敘の全機構中に織込む方法をとるものである。文法體系を展開して行く途上、機構の楔の如く打込んで行くものである。此の展敘様式は體系機構の樂屋裏まで残る限なくさらけ出さざるを得ず、啓蒙的敎化的價值は少いかも知れないが、専門的試論として最も良心的なものと言はなければならぬ。併し多くは所期の目的に到達することが出来ないで、徒に文法學のニヒリズムに終つてしまふ結果になり勝である。只イエスベルセンが「文法哲學」の中で述べてゐる三段 (three ranks) の説は傑作であると思ふ。併し傑作であるだけそこに無理があるのである。

殊に個々の文法事實に就いて徹底的に検討して居らず、又形態に對する配意が不充分である。その爲 primary word, secondary word, tertiary word などと言つても、單によい思附といふ程度のものに過ぎず、歴史的價值はあるがそれ自身の自律的價值の乏しいものと言はねばならぬ。かやうな展敘様式は又、文法體系を機能範疇によつて縦貫するものであるとも考へることが出来る。そこに動

詞論とか代名詞論などと言つた分肢的體系で相應價値の高い研究も出て來るのである。かやうなものに對して、機能範疇論を他と引離して立てる様式がある。随つて之は機能範疇論が體系を横斷するのである。之には機能範疇論を終結的なものとして體系展敍の後方に置くものと、出立的なものとして前方に置くものとある。前者は第一の如きものを通過し、更に之を横並び的に纏めんとして一步を進めたものと言ふべきであるが、文法體系に對する態度は第一のものと同様極めて慎重であり、謙遜である。所謂科學的文法を標榜するものはかやうな様式を執らうとする。例へばイエルムスレウの「一般文法の原理」の如き述作はそれである。後者は展敍様式として最も整つて居り、且啓蒙的敎化的價値も高いものと言はなければならぬ。即ち先づ文法體系の最高の本質的なものから發出し、次第に細部の現實的なものに説及んで、全體系機構を一眸に收めしめんとするものである。前者に於て到達した地點から今一度逆視し、眞に自家の所見を展開せんとする形のものである。併し單にかゝる様式の外形をのみ整へそれを以て文法體系なりと考へてはならぬ。展敍様式は常に内面的でなければならぬ。良心的でなければならぬ。内なる機構から必然的に生れ出たものでなければならぬ。こけ威しであつてはならぬ。傳統的なものとか外來的なものを、只無自覺に模倣するものであつてはならぬ。常に創造的でなければならぬ。私はこの意味から富士谷成章の文法體系はギリシャ・ラテンの文法やサンスクリット文典などと共に世界有数のものであると思ふ。彼は先づ名、

装、あゆひ、かざしの四つの範疇を立て、而してそれらの範疇に於て「あゆひ抄」とか「かざし抄」とか「装抄」(現存せず)とかといふものを述作し、其の内容は先づ形態的見地の下に詳細なる分類があり、かくて雑多な文法事實を事例を挙げ乍ら細かく説明してゐるのである。私はかやうに完備した文法體系は恐らく世界にも餘り例のない事であらうと思ふ。本居一派の文法體系も特徴あるものであるが、併しそれは助詞とか動詞とかといふ特別な部分に就いての縦斷體系として勝れてゐるのであつて、文法の全體系に就いては富士谷派のものに一籌を輸するものと言はねばならぬ。兎も角我が國文法學史の源流に於て、已にかやうな優秀なる文法體系の典例があるに拘らず、現在尙、明治以來の歐化主義的傳統を墨守しなければならぬ理由はどこにあるのであらうか。ギリシャテンの文法範疇が世界の言語を統率する一般者として君臨してゐる形になつてゐたのが現在までの狀態であつた。サンスクリットの文法古典は、稍消極的ではあつたが、十九世紀の西歐言語學界に一大革新を齎したのであつた。私は敢へて文法學の復古を唱へるものではないが、現在我が國の文法學といふものが眞に歴史的立場に立つて、過去を省み將來を考へ、權威ある日本文法體系を創造して行く道に進まなければならぬと思ふ。それが實に日本學に寄與するばかりではなく、世界に貢獻する所以ではないかと思ふのである。

三

文法體系は語彙的纏綿を克服せる文法事實の純一な姿である。その絶頂は機能範疇であり中腹部は文法形態であり、而して個々の文法事實は山の麓として直ちに總體的な言語活動の地盤に接觸してゐるのである。かやうな機構的全一が一言語の文法體系の形相である。併しかゝる體系機構を形造つてゐるものの内實は如何なるものであらうか。勿論それは社會的制約であり、歴史的習慣である。文法的事實と雖も能記と所記との聯合關係物と考へなければならぬ。比例的物質と考へねばならぬ。一種の記號物として、記號學的支配の下に考へて行かなければならぬ。即ち斷續的な要素の粗密波的相關々係は何等かの意義内容を表示し、かゝる相關々係を表示するものとして特に發達せるものが形態であり、形態の統一として更に全文法機能の統轄的指標物として機能範疇が意識せられる。併しかやうな制約習慣物も只無意味に此の人間社會に成立してゐるものではなく、何等かの意味に於て人間社會から切取られた物象でなければならぬ。その生産者として、孚み育てた親としての人間社會の息吹のかゝつたものでなければならぬ。人間社會の反映物でなければならぬ。人間社會の精神的結晶物でなければならぬ。そこに文法體系の全機構といふものが、それを創造した民族社會の自然的表現物として考へらるべき根據があるのである。部分として即ち語彙的にはテセ

イであるが、全體的な機能としてはビュセイである。とは言ふものの、私は今こゝで言語社會學とか言語民族學とかといふ方向へ考を進めて行かうとするのではない。外的文體論の如き事を試みようとする積りではない。文法體系に於ける民族社會の精神的表れを論じようとするのではない。さやうな事は純粹言語學としての文法學から逸脱した勞作と言はねばならぬ。所謂外的言語學の範圍内に位置すべきものと言はなければならぬ。少くともそれは、文法學の本論ではなく餘論的なものとしなければならぬ。併し文法體系は人間社會の象徴物として、單なる一視面的なものでないことは一般的に認められなければならぬ。單色的なものでなく、一つ／＼の體系がそれ／＼言語主觀とも言ふべき異色的なものであることは勿論であるが、その一體系内にも複合的なところがあることを認めなければならぬ。文法體系の圓錐を、どこをどう截つてみても、その斷面には何等かの同色異調的な層が現れるのである。その同色は體系全體としての主觀性であるが、異調は體系内の異視面的表れである。前者は外的言語學の對象であるが、後者は一言語の體系内部の問題であつて、文法學に於て一應是非考察して置かねばならぬ。謂はゞ文法體系には一般に分剝性とも言ふべきものが認められ、一言語の文法體系にもその觀點の相違によつて幾つかの異類の體系を立てることが出来るのである。それは如何なることを言ふのであるか。

今右の如き事柄を解明せんが爲に多少嚮に立還つて考へて見なければならぬ。文法體系は雜多な

文法事實を純一なる體系事實となせるものであり、文法事實は言語の言語とも稱せらるべき言語性の最も純粹なる部分である。言語は總體的な言語活動の社會面として、その最も本質的な側面である。言語活動は言ふこと、即ち言語行動とも稱せらるべき一種の心的行動に於ける心と心との媒介作用的實體である。此處に於て文法體系は、心と心との交渉、心的行動現象の媒物の最醇なる部分と考へざるを得ないのである。我が汝に、汝が我に語る對話現象の媒介物として最も本質的骨髓的なものと考へざるを得ないのである。故に文法體系を正すことは總て國家社會の精神界文化生活の全面を正しきに回へす所以ともなるのであつて、假初にも忽緒に附してはならないものである。文法體系はかゝる行動的世界、歴史的社會的現實に於て内實的に如何なる交渉を持つか。行動といふのは一般に我が汝に何事かを行ふことである。我と汝との社會的歴史的ダイナミックである。對話現象である。更に極言すれば對他現象である。即ち行動の最高次の屬性は對他性、汝性でなければならぬ。汝が對在するといふことが行動の形相を成すのである。かゝる行動から對他性、汝性を捨象すれば、行動の内實とも言ふべき製作とか作爲とかと言ふものが残る。製作といふことは一般に物を作ることである。物を作ることは物の要素變更を行ふことである。物を要素に分析しそれを新たな組合せを以て綜合することによつて物を創造することである。そこに技術といふことがあるのであるが、かゝる技術は單なる主觀作用でなく、物の法則性に從つて然することではなければならぬ。

合理的でなければならない。その極科學といふものがその見る目として成立して行くのである。而してかゝる即物的なところに知性とカ理智とかと言ふものが開けてゐるのである。かく物を作るといふことから即物性或は對象性といふものを捨象すれば、單なる主觀的作用とか自動的な生命活動とかが残る。それは製作性に高めることによつて藝術的形象ともなるものであるが、その儘の姿としては、種的生命の個體としての生理活動や反射運動や情緒的表出や主我的衝動など、一般に表出性ともいふべきものが見られるのである。極めて單純なものであるが、人間社會を形成する基底的なものと言はなければならぬ。而して之より更に主我性、自動性を捨象すれば、殘餘は物質自然の如きものに過ぎないのである。以上、行動性より發し製作性表出性と、行動的世界に柱する文法體系の蒙るべき三つの契機を擧げてみたのであるが、かやうなものは具體的には如何なる形で影響を及ぼすのであるか。

行動的世界の右三契機が文法體系に及ぼす影響は、常に個人的な言表を通して間接的でなければならぬ。言試行を経ずして單に之を規定するものではない。故に行動性、製作性、表出性の直通するところは文法體系ではなくて個々の立言である。而してかゝる言が文法體系に打寄せてゐるのである。行動性或は社會性といふものが、言に表れたものを一般に對話性と稱することが出来るかと思ふ。對話は言ふまでもなく我と汝とが相互に呼掛け又他人の事や客觀的事物に就いて語合ふ底のも

ので、最も日常的な言である。然もかやうな對話が他の種々雑多な行動と入亂れてこの行動的世界の實質を形造つてゐるのである。劇といふものはかゝる行動的世界の創作に外ならない。又製作性とか作爲性とかといふものが言に表れたものを一般に敘事性と稱することが出来ると思ふ。敘述性には、直接的に汝といふものの支配がない勿論之を廣い意味から見れば矢張對話的なものとしなければならぬのであるが、その中で特に敘述性として區別する以上は、對者といふものを捨象したものでなければならぬ。對話の如く、行動的世界の眞只中に立つて汝と對在するのではなく、一步退いて今語らんとする事柄に就いて靜かに構想するといふことがなければならぬ。そこに知性が働き、言は分析綜合的となるのである。句を構へ文を敷き分節的言語が生誕するのである。かやうなところから敘事詩や物語文の如きものが直接に創作されるのである。併し人間言語一般は多かれ少かれ常に此の敘述的性格に支配されてゐるのである。最後に表出性といふものが言に表れたものを表情或は抒情性と稱することが出来ると思ふ。表情とか抒情とかといふことは敘述から更に卽物性、對象性を捨象した主觀的情意の表現である。之は最も原始的な言の姿であるが、實に文學性の根源をなすもので、種々の文學の様式は皆之を製作性に、更に對話性に昇華せしめたものに外ならない。特に抒情詩は直接こゝから生れ出るものでなければならず、隨筆文學の如きもかゝる抒情を敘事的コブラで繋いだ連珠である。以上は行動的世界に直接する言の分野として對話性、敘述性、表情性

の三つのものを擧げて見たのであるが、かやうな契機が常に文法體系に押寄せてゐるのである。そこに文法體系といふものは如何なることになるであらうか。

對話性、敘述性、表情性の三契機の中、文法體系の中心部に觸れてゐるものは敘述性である。敘述性といふことは事に即して言を述べる方向である。述べるは延べるを聯想させる如く言を延展することである。それは時間的なものが空間を占有して行くことに外ならない。直線的なものが圓環的となることに外ならない。そこに構想といふことがなければならぬ。言を作るといふことがなければならぬ。言の内部工作といふことがなければならぬ。人間が物を作るといふことは常に要素の變換作用を出でない。敘述の眞義もかゝる言に於ける要素變換作用にある。言が分析綜合過程を経てそれ自身を整へて行くことである。かやうなことは内から言へば知性の介入であり、外から言へば分節的延展である。理智の力が言を粗密波的展開とするのである。而してその向かふところは論理でありロゴスの機構である。故に敘述性は向論理性であり言の理智介入性である。かゝる敘述性に社會的要因が介入して制約體制をとれるものが文法事實の根幹をなし、文法體系は一般にかかる論理的制約物によつて支へられてゐる。論理的機構は文法體系の中心部であり骨子である。人間言語の特質といふものは實にこゝにあるのである。我々が言語を發する場合、只單一言語を孤立的斷片的に用ひるやうなこともあるが、多く其の内部が分析綜合過程をとり、要素の依存的關係態

となつてゐる。粗密波的斷續相をとる。然もそれは無意味な單なる形式的斷續ではなく、そこに論理性的なものが對應してゐるのである。詞の切れつゝきには常に知性的なものが介入してゐるのである。勿論それはイエス・ペルセンの言ふやうに、より寛容なる論理 (a broader-minded logic) の如きものであり、更に沒論理的思惟、或は超論理的思念ともいふべき制約的習慣的なものであるが、兎も角人間社會の論理性に根を下してゐるものと考へなければならぬ。論理性的の特質は種々あるが、根本的には矛盾的结合の離接である。即ち具體的事物の矛盾性を解析し、之を自由に綜合することである。否自由と言つても、それは主觀的でなく何處までも物の法則性に從ふといふことがなければならぬ。合理的でなければならぬ。かゝる論理性的の根本契機は矛盾性の把握といふことであるが、矛盾とは何か。それは徹底的に相反するものの關係でなければならぬ。不可容性でなければならぬ。絶對の無を媒介とすることではなければならぬ。而してかゝる關係を直線的時間的な形に遷せば、一を二にし、二を一にすることに外ならぬ。單なる一や多の連なりに矛盾關係といふことを表すことは不可能である。こゝに於て知性に根を張る言語の斷續的形式は二單位的とならざるを得ないのである。而してそれが複雑となれば二單位的累加の相を呈することとなるのである。文法事實を敘述性の面から眺める立場は徹底的にかゝる二單位的累加機構として之を體系づけて行かねばならぬ。文法體系を矛盾自己同一の機構として形成して行かねばならぬ。一言語に現れた向論

理的機構を解明しなければならぬ。日本語ならば日本語が、どこまで深く論理性に進み其の姿體は如何なるものであるかを示さねばならぬ。併し私のかゝる言を曲解して、徒に文法體系と論理體系とを混同するものであるかの如く考へてはならぬ。文法の論理機構は言語に表れた論理である。言語が消化し得たる論理性である。一言語の制約論理である。一般論理といふものは人間社會のあらゆる知性を集中し、それらの見る目として獲得した論理であるが、文法體系としての論理性は其の言語の力で獲得した言語主觀的な論理である。

多くの文法體系は右の如き敘述性に接觸する論理的な文法體系である。形態論的であると言つても實はその裡に論理的範疇が潜んでゐるのである。勿論文法體系はかゝる論理的機構を骨髄とするものでなければならぬ。言語に文法事實の内屬せる抑々の始りは言語自體の分析綜合性にあると言はなければならぬ。單一的言語にあつては如何にしても文法などの成立し様はない。文法の事實と言語の分析綜合性とはそれこそ密接不離の關係である。分析綜合的になるといふことは取りも直さず理智の介入を意味し、言語が向論理的となることである。故に文法の事實は言語の論理であると考へてよい程のものである。それは制約的論理、論理的習慣物とも言ふべき超論理的な論理性ではあるが、その根張る基底は論理の支配する世界である。文法は論理性の記號物質であるとも言へる。併し文法體系には論理的機構以外のものが潜み込んでゐることを見逃してはならない。即ち對話性

表情性的のものが混入し、更に進んではその體系を單なる論理的文法體系ではなく、分剝性あるものとしてゐることを認めなければならぬ。一言語の文法體系に於て、論理的機構を根幹とせる複合的體系と言つたものになつてゐることに注意しなければならぬ。勿論それは單なる言と間違へてはならぬ。其の場だけの個人的創意と混同してはならぬ。言の世界は自由な世界である。個人的才能技術の横行する世界である。如何に言葉上手なお世辭であつても、如何に魅惑的な言廻しであつても、かやうなものを齎して文法體系を混亂せしめるやうなことがあつてはならぬ。併し又そこに何等か特異な文法的事實があるにも拘らず、之を迂闊に見逃しては無論いけない。否見逃さないにしても、只無理遣に論理的體系内の何處かに押込めて置かうとするやうなことがあつてもならぬ。從來の文法體系といふものは皆それであつた。さうして又其處に惱の種があつたのである。科學といふものは言ふまでもなく、何處までも事實性に從つて行くといふことがなければならぬ。只體系を作るのが科學の能ではない。それは主觀的な體系に過ぎない。科學的體系は何處までも事實に即した客觀的な體系でなければならぬ。一體體系といふものは、寧ろ今直ちに完全なものが出来なくてよい程のものである。大きく言へば、それは歴史的社會的努力で成立して行くのであつて、個々の科學者といふものはその一人柱に過ぎないのである。然るに今強引に體系一元として纏めて見たところで、それが事實性に忠實でないものであつたら、所謂砂上の樓閣と等しく、暫くにしてその存在

理由を失はなければならないのである。かやうな意味に於て今論理的機構の體系から獨立して何等か別の體系として分剝すべき性質のものを、無法にも論理的體系内に押込めようとする遣方は如何にも非科學的ではないかと思ふのである。勿論それはかやうなことの餘り顯著でない、單に論理的文法體系の如きもののみで結構間に合ふ、西歐言語に於てはそれでも差支がなかつたかも知れない。併し日本語の如き言語では、かゝる論理的體系だけで到底その文法事實の全面を解明し兼ねるのである。其處に何物か泄れて行くものがあるのである。然るに今日までの文法體系の多くは、西洋流のものに依存してゐた爲か無論それは論理的なものであつて、中には一般論理と混同さへしてゐる程であり、さうして之等のものは體系のどこかに淋しく貼附されてあるに過ぎなかつた。思ふに、最近日本語に對する愛護とか禮讃とかといふ聲が頻に叫ばれてゐるが、さやうな事も眞に日本語の事實の奥底を見極めないで、只外から囃子立てゝゐるのでは何にもならないのである。それは學者の仕事ではない。それよりもかやうな事實性をよく見抜いて、今まで西歐の學者などが氣にも留めなかつた新體系の成立すべき分野を、この日本語によつて中外に示さなくてはならぬ。これこそ眞に學者らしい日本語の愛護禮讃であり、引いては又世界科學に對する寄與貢獻ともなふと思ふ。

論理的文法體系から剝離して行く分野は言の世界以外のものでなければならぬが、然もそれは單なる語彙的なものであつてはならぬ。幾ら社會的歴史的となつたと言つても慣用語や成句の程度で

は事新しく別に體系を立てる必要はない。それは辭書とか語類集とかといふものの何處かに擧げて置けば事足りる。文法事實としてその體系化を要求する以上は、それが語彙的纏綿を一切排除しても尙殘存せる何物かでなければならぬ。記號質料ではなく記號形相でなければならぬ。語そのものの句そのものではなくて、それ等の相關々係でなければならぬ。併しかゝる相關々係も、論理的なものによつて媒介されてゐるに過ぎないものならば勿論別體系を立てる必要はない。それは論理的文法體系の一部を成すものである。その相關々係が論理的なもの以外のものによつて媒介されてゐなければならぬ。單なる敘述敘事に起因するものでなく、それ以外のものの爲に成立してゐるものでなければならぬ。それは如何なるものであるか。

私はかやうな意味のものを、言の對話性と表情性とに於て求めなければならぬと思ふのである。勿論文法事實は關係的なものである以上、論理的なものが最も豊富に成立し、且その樞要部をなすことは當然である。文法體系の根幹は敘述性に於て成立する論理機構的なものであることは否めない。併し對話性、表情性の如きものも立言の重要な契機である以上は、何等かの意味に於て文法の事實に觸れてゐなければならぬ。現に日本語の如きは比較的それらのものが顯著に見られ、從來の論理的文法體系に獨立して、それらの立場から特異な別體系を立て得る可能性が充分あるのである。更に言へば論理的體系に強壓されてゐる世界のどこかの言語の中で、かやうな立場から立てら

れるものの方が其の文法體系の根幹的なものになる如き文法性を有する言語も無いとも限らぬ。それは兎も角として之等に依つて立てられる體系は、そのダイメンションを異にするのである。論理的體系と、その體系の展開する次元が違ふのである。私は文法體系に於て一般的に三次元的廣がりを見なければならぬと思ふのである。

先づ言の對話性から來る文法事實に就いて考へてみよう。對話といふことは我が汝に、汝が我にといふ様に種々の事柄について相語ることであるが、かやうな事に關し今少しく立入つて考へて見なければならぬ。對話は二つの方面から眺めることが出来る。その第一は對話的緊張によつて相互の對話内容を鍛へて行く方面で、之はやがて種々の意味の辯證法的理論にまで發展して行くものである。併しそれは對話性そのものを直接的に問題にすると云ふよりは、對話性を方法的に取扱つてゐるものと言はなければならぬ。例へばギリシャの始に於て已にソクラテスのデアレクテケーはプロタゴラスのレートリケーに對立するロゴスの一様式であつた。現代に至つても辯證法は種々に語られてゐるが、それは要するに、ヘーゲル哲學に於て辯證法が實在の論理とせられて以來、具體的な思辯的論理として或は内實的な哲學的方法として用ひられてゐるのである。對話に對するかやうな方法的取扱に對し、私は目的論的取扱とも言ふべき方面を第二に擧げて見たいと思ふ。それは對話的内容を止揚せんが爲の問答法とか辯證法とかといふものではなくて、對話的緊張そのもの

を問題にするのである。前者は論理的關心であるが、之は對話の倫理的關心とも見るべきものである。對話といふのは、單なる自我の主張でもなく對象物に就いて語ることでもない。無論かやうなものが其の内實となつてゐなければならぬのであるが、對話の眞義は我と汝との力學的緊張でなければならぬ。尙詮じ詰めて言へば、對話性は汝性である。その汝性が反作用的に我の態度を決定せしめ、而して更に第三者的なものに對しても種々に範疇づけを行ふのである。故に對話の實演では先づ何よりも相手への配意といふ事が行はれなければならぬ。相手の地位、門地、位階、官等とか、或は人格、教養、年齢、性別、身形、態度とかといったものを先づ認識しなければならぬ。具體的な相手を掴まなければならぬ。それが對話實演の根本眼目となるのである。相手の見えない電話などでは聲附でゝもそれを讀まなければならぬ。兎も角對話の際は先づ全神經を相手方に注ぐのである。次に自己を省み、自己と相手との相關々係或は比例關係と言つたものを決定する。而してかゝる比例關係の尺度を以て、更に第三者的存在に對しても、相手方の領域内に屬すべきもの自分の領域内のもの、或は全然何れにも屬さない純客觀界と言つた風に區別し範疇づけるのである。對話では、以上の様に決定せられた區別意識に於て、相互に種々の事柄が語られて行くのである。謂はゞ、對話といふものは即興的に倫理的世界觀を描き乍ら語り行くものである。然も對話の時折、相手方の素振態度とか自己の心境、或は環境の變化などによつて、その倫理的世界觀に訂正を加へ、

又歪を持たせ變化を與へて行かなければならぬ。つまり臨機應變に世界觀を仕立て、行かなければならぬ。そこに或時は訴へる如く、或時は哀願し或時は威嚇し或時に揶揄し、又沈黙する。それは兎も角として、對話性の庶幾するところは倫理的である。今當面せる對話的場に於て、出来るだけ倫理的バランスのとれた世界觀を堅持し、それを鑄型として種々に言を仕立て、行くのである。若し中途でその鑄型に合はないやうな不都合な言を發したと思へば取消すなり言換へるなりしなければならぬ。それは敘述の場合と同斷である。物の言ひ様で角が立つといふ諺の通り、幾らうまい事を言つてゐても、倫理的バランスのとり方がまづかつたり、又その鑄型に言葉がスムーズに箝つて來なかつたりすれば切角の口上も支離滅裂である。以上の如く、對話を對話性そのものと見る第二の觀點は、對話を對話内容止揚の爲のものとして見る第一の觀點と全く異なる面に立つものである。行動的であり社交的であり倫理的である。かやうな對話性が言の領域を超え言語の領域へ進出し、更に語彙的境地を克服し文法の事實にまで昇華したものが倫理的文法體系とも言ふべき特異な文法體系を成立せしめるものと思ふのである。

かやうな倫理的な文法事實は、例へばフランス語とかドイツ語などにも多少萌芽的乃至痕跡的に見ることが出来るのであるが、日本語と朝鮮語に於て最も顯著に發達してゐる。我が國では之を敬語法とか敬讓法とか、或は待遇法などと稱せられ、最近漸く學界の注目を牽くやうになつたもので

ある。然し或少數のものを除いては、只漫然とそれを國民精神などに結び付けて問題にしてゐるに過ぎず、未だ殆んどその眞義眞相を究めようとしてゐないかの如き觀があるのは遺憾至極なことである。一體敬語法とか待遇法とかと稱せられる倫理的文法の事實は、對話性に於ける突差の倫理的世界觀を、直線的時間的な話線の上に反映せしめんとする努力が社會的制約として結晶したものである。敘述は論理的世界觀に立つものとすれば對話は倫理的世界觀に立つものであるが、倫理的文法といふのは、それが線條化されるに就いての習慣物である。そこに又二單位的な相關々係といふものが生じて來なければならぬのである。然して、その基準尺度となるものが汝性、即ち汝といふものにポイントを置いた我と汝との緊張關係に外ならない。此の我と汝との緊張關係は、或時は敬讓ともなり或時は尊卑ともなり、それらの間に、又種々微妙な相違區別があるのである。然もこの我と汝との緊張關係は、單なる我と汝との間柄だけに止まらないで、彼の世界客觀的世界をも其の尺度で測り範疇づけるのである。即ち汝の領域と我的領域とに區別し、矢張略同様な取扱をするのである。敬讓尊卑の微妙な相違區別が表されるのである。而して最後に殘る我にも汝にも所屬しない純客觀界はどうするかと言へば、それに對しても全然倫理觀的なものが働かないのではない。即ち單なる敘述内容として取扱つてゐるのではない。謂はゞ、今放出せんとする話の全體に倫理的待遇を與へることによつて、かゝる純客觀界をも範疇づけの圏内に含めてゐるのである。つまり汝に

對する、我の今語らんとする話の全機構といった緊張關係が最終的に表れるのである。それが「ます」とか「です」とか「候」とか「待り」などといふもので結ばれるのであるが、之は倫理的文法の極限的事實とも言ふべきものである。併し極限的事實とは言ひ條、それは單なる最終的なものではなく、實のところアルファでありオメガであるのである。倫理的文法に終始一貫するものは我と汝、正確に言へば我の汝への緊張でなければならぬ。而して之に敘述が纏綿することによつて、倫理的文法は二單位的累加の相を呈するのである。即ち先づ決定的中軸となるべき語る我と聽く汝との實在的緊張關係が成立し、その相關的尺度が語る話の全面を支配する。次いで話の内部に於ける我と汝の緊張、又我の領域と汝の領域との緊張更に純他界をも含む話全體の汝への緊張といふやうに、二單位的なものが累加せられるのである。

倫理的文法は極めて特異なる文法事實であり、論理面とは全く次元を異にせるところに成立してゐる相關々係物であるといふことは、略上の如き事を言ふのであるが、更にかゝる種々の緊張關係を表示する能記物とも見做すべきもの、倫理的文法の形態とも稱すべきものに就いて一言し、その特異性を一層明かにして置きたいと思ふ。對話性の緊張關係を直接的に表示するものは敘述性を表す要素である。かゝる敘述要素は、論理的文法に於てはその中軸を成すものとも言ふべきものであるが、倫理的文法に於ては緊張關係の表示素として形態的役割に墮してゐるのである。先づ語る我の

聞く汝に對する關係によつて、種々の崇敬體とか平敘體とかといふものに變形する。而して之は敘述要素の最も外表部に於て行はれる現象である。次にその語られる話の中に、更に我と汝との緊張關係が含まれて居る場合には、その敘述素の内面に著しい變化が起り、多くは他の語彙を以て取換へられるのである。即ち敬讓とか尊卑とかといふのは、主としてかゝる語彙轉換的形態變化によつて表示せられるのである。而して我の領域内と汝の領域内との區別に於ける緊張關係も右に準じて表示せられるのである。かやうに敘述素は、倫理的文法に於ける形態的役割を果しその主觀性を表示する部分となるのである。之に對し、意義部的役割を行ひ客觀性を表示する部分と言へば、我とか汝とか、或は彼とか物とかといふ如き一切の實在物、然も社會的人倫的に範疇づけられた實在物を表示せる要素である。代名詞の支配する所謂體言である。故に倫的文法は實在物の間柄の文法であるとも言へる。而してこの間柄の具體的關係を直接的に表示する部分が、動詞の如き敘述を表示せる要素で形成せられてゐるのである。隨つて此の敘述的要素だけを取り出して用ひても、そこに倫理的緊張關係といふものが暗示されてある譯であるから、事々しく誰彼と言はなくても結構通ずるのである。以上の様な事から、此處に極めて大膽なる言ひ方が許されるならば、倫理的文法は論理的文法を形態とする、より上位的な面に立つ文法事實であると考へてもよいのである。かくて論理的な文法體系と全くダイメンションを異にする一つの文法體系を立てることが出来るのである。

對話性から來る倫理的文法は、敘述性から來る論理的文法に對し上位面に立つ文法事實であるが、表情性から來る文法の事實は之に反して下位的な面に立つものである。表情といふことは主觀的情意の表出であるが、かやうなものの言語活動に於ける役割に就いては、バイイの説くところは盡し得て餘蘊が無い。彼の文體論といふものは、そのよく耕された肥沃な壤土から咲出た詞の花とも言ふべきものである。併し表情性といふものは只單に文體論的なもので終始するものと考へてはならない。所謂言の言語學の領域を超え言語の言語學の領内を侵し、更に文法學の境域へもひたぐと押寄せて來てゐるのである。勿論表情性はどちらかと言へば文法事實を破壊する方が多い。種々の省略法、倒置法、重加法、贅語法等何れ劣らず論理的文法の鐵則を危殆に頻せしめる代物である。併しそれも表情の本來的性質上止むを得ないのである。表情性といふのはその元を糺せば、泣いたり喚いたり笑つたりする動物的生命の表れである。表情はデモニッシュである。併し表情性は破壊ばかりしてゐるものでもない。積極的に文法事實の建設にも參與してゐるのである。それは感情文法とか審美的文法などと稱すべき特異畫な文法事實を成立せしめてゐるのである。而してかやうな文法事實が、表情性から如何にして作られ行くかと言へば、私は、文學特に詩歌の力であると思ふのである。詩歌の創作は一方に於てよくこの表情的デモニッシュを御し調整し、更に文法の事實へまです昇華せしめてゐるのである。此の意味からして文學語とか詩語歌語などといふものを今一度見直

してみなければならぬのではなからうか。一體最近の言語學者の通弊として、文獻的言語を輕視し、且文學語などといふものに對して冷やかな態度をとらんとする風がある。勿論市井の自然的言語活動、山村僻地の方言鄙語俚語等の中には、その素朴掬すべき豊富なる研究材料があるのであるが、只管かやうなもののみを重視し、恰も言語學の主對象が此處に在るかの如きことを主張するのは一種の反動思想であると思ふ。それは本末顛倒に陥つてゐるものでなからうか。言語學を博物學とか地理學の如きものと混同してゐるのではなからうか。私をして言はしむれば、言語學に於ては之等自然語は、それ／＼分に應じてゐるのではなく、私をして言はしむれば、言語學に於ては之等矢張中心的な對象となるべきものである。更に言へば、言語採集などに憂身を窺してゐるよりは、昔から詩聖文豪と謂はれる人々が心肝を碎いて鍊りに鍊つた言靈の妙機を、徹底的に研究してみるのがどれだけ價值のある仕事かわからない。之等の人々は皆それ／＼の立場で、その國の國語の力を最大限に發現せしめてゐる。言語活動の極限位に立つ人々である。此の意味から私は我が國語學界に新しい古典主義といふものの生れ出でんことを庶幾して止まない。言語學は今一度文獻學的原郷に省みる必要があると思ふ。市井の民衆言語は循環小數的な繰言が多い。

審美的文法事實といふのは如何なるものであるか。それは文法の事實である以上、個々の美言麗辭の如きものであつてはならない。枕詞序詞緣語掛詞の如きものでもない。又種々の修辭方法の如

きものでは尙更ない。矢張話線に於ける一種の相關々係でなければならぬ。記號間の函數關係でなければならぬ。而してその間に審美的表情性の介入せるものでなければならぬ。言語活動に於ける情意的表現を審美的に調整せんが爲の記號的相關でなければならぬ。かやうなものは如何なる言語事實であるか。私は之を我が國平安朝の文學語の中で成立したものと目せられる、所謂係結の法の如きものに求め得ると思ふのである。係結といふのは如何なることであるか。それは先づ西歐語の性や數の一致照應の如きものと本質に異なるものでなければならぬ。性數などといふものは、名詞とか動詞とか形容詞などといふ如き、客觀的意義内容を有する語の相關々係を統一するための文法事實である。然るに係結の法といふのは、名詞動詞形容詞の如き客觀的意義内容を有する語に膠着し或は添加せらるべき要素間の相關々係を統一するための文法事實である。即ち前者は意義部間の相關々係と見做すべきものであるが、後者は形態部間の相關々係とも言ふべきものである。随つて後者では、その形態部内に於て更に意義部的な語彙傾向の部分と、形態部的な文法傾向の部分とが相分れ、かくて係結といふのは其の前者の相關々係を統一せんが爲の、後者の照應一致關係でなければならぬ。謂はゞ形態の形態部に於ける照應一致と言ふべきものである。係結に就いては先づ以上の事が理解されなければならぬ。故に係結の法は形態の文法である。手爾乎波の文法である。玉の緒の文法である。形態部を意義部から抽象して立てた文法體系である。廣い意味での名の部分を

拾象せる殘餘の體系づけである。何が故にかやうなものが成立するやうになつたのであるか。それは日本語の形態の全面に表情性が侵入し、形態をして獨自的存在たらしめたからである。而してその原動力となつたものは平安朝に於て殊に隆昌を極めた詩歌であると思ふ。一體表情性が文法事實として跳梁し得る場合は此の形態部を措いて外にないのである。この事は嘗に日本語ばかりではなく恐らく言語一般に通ずる事柄であらうと思ふ。意義部は論理的敘述性の領域であり、表情性が眞に己が根據と定めることを許されないところである。表情性の入込むことの出来る唯一の世界は形態部である。言語主觀の表れと言ふべき形態部こそ、主觀的情意の表現である表情性に恰好の安住地でなければならぬ。かくて日本語では、表情性が形態部に入込み特有な歪を作ることによつて、全形態部を獨自な體系づけ可能の面とした譯である。そこに表情性に對應し之を表示する意義部的なもの、之等の相關々係を示しその結紐ともなる形態部的なものが、形態の形態部として成立してゐるのである。

審美的文法、或は感情的文法の體系は以上の如き意味での係結に於ける特異な文法體系である。それは表情面から眺めた全手爾乎波の體系づけである。助詞とか助動詞とか活用語尾などと稱せられる手爾乎波の總てを、かゝる情意表出の強度様相などと言つた視面から體系づけることが出来るのである。然もそれは單なる語彙的なものでなく、係に對する結といふやうに二單位的相關物とし

て認識しなければならぬのである。而してそれらの複雑なるものに於ては、かゝる二單位的相關の累加物として、その情緒纏綿と次續して行く相を捉へなければならぬ。かやうな審美的文法の認識は先づ歌學者によつて始められ、それが國學者によつて繼承せられ、かくてそれを眞に體系づけることが出來たのは本居宣長の紐鏡と玉の緒とに於てであつた。前者はその圖式體系であり、後者は八代集の和歌を例證とし乍ら其の具體的體系を展開したものである。而して係を「は、も、徒」「ぞ、の、や、何」「こそ」の三條に範疇づけ、結を四十三段に類別し、その中に又種々の區別があるのである。之は我が國文法學史上實に偉大な業績と言はねばならぬ。要するに中世から江戸時代にかけての文法學といふものは、和歌中心の審美的文法體系に主力が注がれてあつたのである。然るにかゝる中に在つて富士谷成章の文法體系は異彩あるものであつた。それは何れかと言へば論理的方向に傾いたものである。勿論時代の然らしむるところで、彼の視點は矢張形態的なものに注がれてゐる。然も研究の對象は常に和歌が中心である。併しその分析の仕方なり體系の立方といふものは、當時の一般の學者とは異なり何處までも論理的であり理詰である。かやうな事が富士谷文法に共鳴して來る人々の少かつた大きな理由であると思ふ。明治は如何なる事を爲した時代であるか。それは歐米の論理的文法體系を輸入し、本居系統の文法に種々の方面から改組を與へた時代であつた。そこに前代のあらゆる善きものも解體し霧散してしまつた。かゝる間に立つて、山田孝雄博士は富

士谷文法の眞價を見出され獨自の文法體系を示されたのであるが、何よりも特筆大書すべき業績は倫理的文法に對し體系づけを爲された事である。かくて昭和の代に入り所謂敬語法の時代を現出せしめるに至つたのである。要するに富士谷成章の論理的文法體系、本居宣長の審美的文法體系、山田孝雄博士の倫理的文法體系の三は我が國文法學上の大金字塔である。

四

文法體系は雜多な文法事實の語彙的羈絆を超脱せる純粹言語狀態でなければならぬ。語彙的纏綿のまゝの單なる事實性の記載や、語彙的事實の混在を容許せる共時的言語狀態ではなく、かゝる語彙的なものの一切を捨象せる言語の數理體系でなければならぬ。故に文法體系は種々の言語學的成果の最高峰に位すべきものであり、その照明となるべきものである。文法體系の指標がなくては諸他の言語學的勞作は恰も舵を失へる船の如く、暗夜に曠野を行く如く、只徒に雜然たる記號物質界に彷徨するのみである。文法體系の定立こそ言語學に終始一貫すべき中軸的作業でなければならぬ。一切の言語學的勞作はこゝに歸一し、此處より發出するところに各々その所を得て機能を充分正當に發揮することが出來、隨つて言語學的全機構が混一體となり完全にその社會的歴史的使命を果し得るのである。然も言語學は記號學中特殊な地位を占め、記號學の運命は一にこの言語學の

成果如何に懸つてゐるのである。而して其の記號學は世の人々に誤解されてゐるが如く、無味乾燥な單なる形骸的な學問ではなく、精神物質兩科學面を繋ぎ之等をして全一的に發展せしめる契機となるべきものとして、全科學全文化の生命核とも言ふべきものである。教學の樞機である。かやうに考へて行くと言語文法の學の使命は實に重且大なりと言はねばならぬ。一國の教學文化を測るバロメーターは言語學、殊に文法學の成果如何にあると言つてもよい。文法體系の蕪雜なる民族國家或は時代の創造する文化といふものは、必ずやその無統整にして野卑なることを暴露してゐる。而してかゝる文法體系の究極點は機能範疇の構成にあるのである。故に文法學者がその叡智を砥ぎ澄まし、眞實なる機能範疇を定立する作業は、その民族國家の教學文化の命運を取扱ふ程のものである。併しかゝる機能範疇とか文法體系といふものは、單に個人的學者の主觀的作業によつて一舉に製作さるべき性質のものではない。事實性と方法性との社會的歴史的な辯證法的發展の中に成立して行くものでなければならぬ。個人的學者はその大業の一人柱に過ぎない。そこに正しい傳統の繼承と將來への創造的推進といふことがなければならぬ。價值ある業績といふものは常にかやうな形態を持つものでなければならぬ。外國の方法理論を取入れるのも此の爲に外ならない。單に外國の理念を笠に着て學界を占有する爲ではないのである。又徒に循環的な資料の蒐集整理を事とするとのみが正しき學問の道と考へてはならぬ。それらも過去を承け將來への一歩的前進の爲の一助で

なければならぬ。

かゝる文法體系はこの行動的世界の媒物として、只單視面的なものであり得ない。勿論その言語の主觀的性格によつて、體系は種々の姿態をとるものであるが、一般的に言つて略三角錐の三つの側面の如く、三視面的と考へなければならぬ。即ちその第一は論理的體系面であり、第二は倫理的體系面であり、第三は審美的體系面である。而して多くの言語は論理的體系面が極度に廣く、恰も文法は言語的論理の如き觀を呈してゐるのであるが、日本語の如きはこの三視面的體系が略均衡に發達し殆んど正三角錐に近いものと言へよう。更に又倫理的側面とか審美的側面とかが、特に優勢な言語も考へることが出来るのである。何れにせよ、凡そ如何なる言語にありても、此の三視面から一應眺めて其の文法體系を立てなければならぬ。然らざれば眞の具體的體系といふものを捉へることが出来ないのである。一體、文法體系が具體的であるとか抽象的であるとかと言ふのは、かやうなところに於ける區別でなければならぬ。眞にその全視面を充足し得てゐる體系は具體的體系であり、單視面的なものは抽象的體系である。所謂盡し得てゐない文法といふものは、かゝる抽象的體系に外ならない。併し抽象的體系といふものを排撃してゐる譯ではない。それどころか、時にとつて大いに必要なのである。例へば作歌の文法、俳諧の文法などといふものは専ら審美的側面から眺めた體系の方が都合がよい。又社交とか書翰とか牋の爲の文法は倫理的側面から眺めて立てたも

の方が便利である。更に、學校文典、教化文典などといふものは論理的側面からのものの方が要求される。そののみか、現實に立てられる具體的體系といふものは、實は抽象體系のモニターである。與へられた事實を種々の角度視面から見ることに、一旦抽象體系に分割し、而して後之を撮合統一したものが具體的體系に外ならない。故に具體的體系を捉へんとするには、かゝる抽象體系に分割する技術が先行しなければならぬのである。而してかゝる分割面の最も本質的なものは、論理面と倫理面と審美面との三面であり、如何なる分割も常に此の三面に沿うて行はれなければならない。かやうにして得られた雑多な抽象體系の立體像が一言語の具體的體系である。

以上は文法體系の内包上の問題を主として述べて見たのであるが、次にその外延上の問題に就き少しく考へてみて此の論述を終ることとする。

外延上の問題といふのは一般的文法體系と特殊文法體系に關する眞の理解である。一體、言語に變異を來し種々の特殊相の生じてゐるのは如何なることであるか。その根元は各種の通時的諸變異に外ならない。通時的諸變異とは如何なるものであるか。それは體系自體の革命的變異ではなく體系内部に徐々に行はれて行く部分的變異である。一般に語彙的變異と見らるべきものである。而してかやうな通時的變異は單獨的に或は隨伴的に行はれ、又それが繼續的に或は突發的に推移するのであるが、その間に變異相の粗密的相違が見られる。そこに時代的に種々の特殊相を考へることが

出來、史的言語學の如きものも想定せられるのである。かゝる時軸に沿へる變異相が地域的に定置されると、そこに一系の連續的多數の地方語といふものが出來る。通時的變異が記録として留められると同様に、地方語として残つて行くのである。併し記録として留められたものも早化石的存在であるが、地方語として残つたものは活動的である。隨つて地方語に於て又それゝ通時的變異があり、それらが方處的に散布し地方語の地方語とも言ふべきものが生じて行く。かくて無限に分岐するのであるが、それら地域的變異の間にも又粗密の度がある。そこに等語線 (ligne isoglosses) とか改新波 (onde d'innovation) などといふものが認められ、幾つかの方域的な特殊相に纏めることが出來、方言といふものが考へられるのである。地理的言語學とか方言學とかといふものはかゝる地域的外延を對象とするものである。

以上の如く言語は外延的には極めて多面相を呈するのである。極言すれば言語には個人の數だけ特殊相があり、個人の腦中に在るものも又單純なものであり得ない。發達があり衰退がある。そこに心理的言語學といふものがあるのである。併し言語のかゝる特殊相は單なる特殊相として在るのではない。それゝ一般的なるものの上に立つての特殊相でなければならぬ。一般即特殊の特殊相でなければならぬ。一の多の多様性でなければならぬ。然らばかゝる特殊相多様性に對する一般的なるものとは如何なるものであるか。個人的集團の間とか、各種の特殊的な地方語或は方言といふ

ものの上に共通語が成立して行く。例へば家庭語、階級語、職業別の言語、宗教語、學術語、學生語、合言葉、隱語とか、或は通用語、公用語、標準語などがそれである。殊に國家の制定する標準語は共通語の最も模式的なものである。併しかゝる共通語は言語一般と言ふことが出来ない。それはその集團社會の實用上或は政策上等、種々の外在的要因の介入によつて成立し、或は制定せられたもので、矢張一種の特殊相と言はねばならぬ。一般相への思慕の上に立つものであるが、かゝる意味での特殊相と言はなければならぬ。正常なる地位での社會的言語學といふものは、かやうな共通語に對する正しき認識をその任とするものでなければならぬ。又各種の世界語國際言語や基礎語の如きものを論定し、或は制定するとか、比較言語學によつて共同祖語の再構をするなどといふことも、矢張同様一般的なるものに到達する所以ではない。前者は通時相を順視する方法(*prospection*)に於て成立し、後者は通時相を逆視する方法(*retrospection*)に於て成立し、各種の特殊相を超えて將來的或は過去のそれにせよ、一つの共通的なものを立てようとするのであつて、矢張一種の特殊相に外ならない。

然らば眞に一般的なるものといふのは如何なるものであらうか。眞の言語一般はあらゆる特殊相を包括するものでなければならぬ。併し、それはあらゆる特殊相の總體ではない。又比較言語學に於て求める、それらの系列系譜の如きものでもない。單なる總體とか系統とかと言ふものは矢張特

殊相であるかも知れない。又未來的なものを想定し之に繼ぎ足しても同様である。兎も角、事實性そのものの上を驅けめぐつてゐる以上は、一般的なるものの堂宇に到底入ることが不可能である。それには事實性を克服して行かなければならぬ。事實性を克服し、眞に之を超えたるもののみ其の事實性を包括し得るものである。多即一の一は多を超越せる方向のものでなければならぬ。多の一事に固執したり誘惑されてゐる間は一の境地に到達することが出来ないのである。然らばかやうな事實性を克服し事實性を越えたるものとは如何なるものであるか。それは言語の可能態或は理想態の如きものでなければならぬ。言語自體の庶幾する眞の方向でなければならぬ。それは何であるか。それは言語の言語でなければならぬ。一體言語は如何なるものであつたか。それは再三述べた如く、要するに文法的記號である。文法事實の成立が言語をして眞に言語たらしめたのである。文法事實を含まぬ單なる合圖とか囃子などといふものは言語と言ふことが出来ないのである。文法は言語生誕の契機であり、進むべき彼岸であり其の道標でもある。故にあらゆる特殊な言語事實の向かふところは、かゝる文法性でなければならぬ。文法性は一般的なるものの方向である。眞に文法的ならんとする一步々々が、かゝる特殊相の一般へ近づき行く道である。言語一般は眞の文法性でなければならぬ。故に一般即特殊、一即多なる言語は、かゝる文法性によつて統一せられたる特殊相の總體でなければならぬ。比較言語學の言語系統はかゝる文法性を髓とするものでなければならず、

人工語とか基礎語などの設定もかゝる文法性の顯揚の方向になければならぬ。凡そあらゆる過去現在未來に亙る時代的方處的に發生し又發生すべき無限數とも言ふべき特殊相は、總て文法性の一般者の象徴物と言ふことが出来る。言語は本質的に天壤無窮である。

かやうに特殊相から一般者に至る道はどこにあるか。特殊體系が一般的體系に如何にし進み得るのであるか。それにはかゝる特殊體系といふものが如何にして成立してゐるかを反省して見なければならぬ。特殊體系は勿論煩瑣な特殊事實の纏である。併しかゝる特殊體系と雖も一つの文法體系として纏められたるものである以上、向文法的向一般的なる考へなければならぬ。更に言へば低度なる一般的體系である。かやうな特殊體系は如何にして成立したのであるか。その出發は個人的體系、否或時期或時の個人の體系にまで切下げること出来る。兎も角それが文法體系として成立するには語彙的なものを排除するといふことがなければならぬ。併し語彙的なものの排除と言つても只無關にそれは出来るものではない。合理的方法の媒介を俟たなければならない。それは如何なることであるか。記號學的方法一般として表現物を重加し記號物質を析出するといふことがあつた。それは言語的に言へば種々の語文的なものの析出である。文法事實の認識もかゝる重加析出法に依らねばならなかつた。即ち總體的記號を事例としてその中に働く關係性を抽象して行くのである。そこに一つの文法體系といふものが成立して行くのである。併しそれはどこまでも體系の内包的方

向であつた。機能範疇論の極點にまで進んでも對内的方向である。特殊體系が一般體系に到るには體系相互の重加といふことがなければならぬ。特殊體系或は低度の一般體系とも見るべきものを重加することにより、一般的體系或は高度の一般體系に到達して行くのである。そこに、特殊相に未だ纏綿せる語彙的殘渣を排除して、眞の文法性へ進んで行く道が開けてゐるのである。併し文法體系に纏綿せる語彙的なものを排除するといふことは如何なることであるか。それは語彙的記號間の通時的變異を排除することに外ならぬ。特殊體系と特殊體系との間を繋がんとする種々の語彙的變異相を捨象することに外ならぬ。それは如何なることか。勿論眞の機能範疇といふものは原則的には動搖すべき性質のものではない。それは種々の文法體系の尖端部の輻輳する部分である。同じ高嶺の月である。故にかゝる語彙的變異の存する部分は形態以下のものでなければならぬ。然もその射程は特に形態部に注がれるのである。

雜多な特殊體系を重加する技術的媒介によつて、それらを通時的に結附けんとする語彙的變異の繋累を脱却して、文法體系は特殊より一般に近迫して行く。一言語はかゝる一般的なものによつて統合せられた特殊的全一である。日本語とかドイツ語とかフランス語などといふ上位的言語の眞の具體的景觀はかやうなものでなければならず、又種々の方言とか俚語とかといふ下位的言語の内に於てもかゝる意味の統一の姿がなければならぬ。具體的一般と具體的特殊との即一體でなければな

らぬ。のみならず、全世界の言語、謂はゞ人間言語或は言語一般に於てもさやうなことが考へられなければならない。私はかゝる意味から、ソッスールの汎時論とかイエルムスレウの一般文法に於ける抽象體系 (système abstraite) の如き考に關心を持つものであるが、併しそれは類型論 (typologie) の如きものに止まつてはならない。例へばシュライヘルの孤立語、膠着語、屈折語の如きものの定立で終つてはならない。それは未だ語彙的纏綿に拘泥せるものと言はねばならぬ。孤立語から膠着語へ、膠着語から屈折語へ動くものであるといふ理念が介入してゐる。一般文法論はどこまでも深く一般的なもの求めて止まないものでなければならぬ。文法學、否言語學の最深部勞作でなければならぬ。或は説をなす人があつて、私のかやうな一般體系の進路を以て論理とか心理とかいふものに墮し行くものの如く言ふ人があるかも知れない。併しそれは單なる想像論に過ぎない。正當なる記號學的方法を徹底して行きさへすれば決してさやうな論理とか心理とかといふものに陥る懸念はないのである。どこまでも能記所記の比例關係を見失はない限り、如何に深く掘下げて行つても決して他の領界に顛落するものではない。